

研究ノート

歴史化される韻律学

松村 伸一

ここ数年、にわかという趣で、ヴィクトリア朝詩の韻律学（metrics, prosody）に関する研究が次々と発表された。ご承知通り、日本ヴィクトリア朝文化研究学会では原則として、純然たる文学研究は守備範囲外としており、文学とりわけ詩を主な関心とする者としては、忸怩たる思いをすする場面が少なくない。詩の韻律など、まさに当学会の守備範囲外と分類されそうところだが、これら近年の研究に共通する関心が、韻律学を歴史化・政治化しようとする点にあるので、この場をお借りして流れを整理してみるのも、あながち場違いとは言えないのではないかと考えた次第である。「つねに歴史化せよ」というフレデリック・ジェイムスの標語が人文学の広い領域に適用されてすでに久しいが、とうとう韻律学のような〈周縁〉、いや、文学研究の核心にまで及んだのか、というのが当初の感慨だった。もっとも、改めて調べてみると、「にわか」と感じたのは、単に不勉強だったようだ。retrospective に perspective が開けた面もあるにせよ、すでに15年近い研究史を有する潮流である。当然、管見から洩れている成果も多々あるはずだが、ここでは文末に列挙した文献について、その論旨を簡単にたどってみたい。なお紙幅の都合もあり、本稿では著者名および略号によって書名の代用とするケースがあるので、参考文献一覧には、ぜひあらかじめお目通しいただきたい。

そもそも、韻律学を歴史化するとは、どういうことか。英語詩の韻律は well-established な技法の領域であり、だからこそ英詩概論などという講義のはじめに「弱強 (iambic) が英詩の韻律の基本で云々」などと教えたりするのではないかと——それがどうも、そうは言い切れないのである。Derek

Attridge (たまたま今年5月下旬に来日され、講演活動を行った)は早くも1974年に、エリザベス朝詩における韻律論の歴史性を詳述していた。さすがにこれは当学会の守備範囲でないことは明白なので、ごく簡単にかいつまんでおくにとどめるが、ルネサンス期の英国の詩人らにとって、韻律学とはあくまでラテン語詩のそれであった。ラテン語詩の韻律は、音節の長短(長音節には、長母音による「本質的に長い」音節と、短母音の後に子音を伴う「位置によって長い」音節とがある)すなわち quantity (「音量」などと訳される)の組み合わせによって定められている。ラテン語にも強勢(stress, accent)はあるのだが、詩の韻律では「音量」を考慮するのである。一方、英語詩の韻律は、強勢=音節(accentual-syllabic)システムと呼ばれ、母音の強弱の組み合わせとその数によって定めるのが、その言語的特性上「自然」である。しかし後者は学知として伝統をなすに至っていない。ルネサンス文化を謳歌する知識人たちが、古典語詩の韻律法を英語詩に当てはめて「矯正」しようとする試みにたどり着くことは想像に難くない。その葛藤が、かたや古典語と異なる英語の特性に対する意識の高まりへ、さらにはイギリスの国民意識の高まりへと通じていくことも、また同様だろう。さらに付け加えるなら、古典ギリシア・ラテン語という死語の「音」に関わる韻律の問題は、実は、現代の古典語学の知見をもってしても、容易に決着の付かない問題を含んでいる。つまり、韻律法とは、永久不変の法則のようなものではなく、葛藤をはらんだ実践知であり、したがって歴史や文化背景と密接に関連しているのである。同じことはヴィクトリア朝詩の韻律についても言える。そしてルネサンス期とはまた異なる歴史的文脈において、国民国家意識の形成と深く結びつくであろうこともまた推察可能であろう。

さて、韻律論を歴史化する下地として、ヴィクトリア朝詩研究をまるごと歴史・政治の方向へと舵を切らせたのが、Isobel Armstrongの*Victorian Poetry* (1993) および Matthew Reynoldsの*The Realms of Verse* (2001)である。この二著以前の研究に、詩の歴史性や政治性へのまなざしが欠けていたわけではないが(たとえば、Morse Peckhamの名前を挙げておこうか)、この二著は、ヴィクトリア朝詩研究に言語論的転回をもたらしたと言える。文学研究に言語的転回とは、奇妙に思われるかもしれない。しか

し、ヴィクトリア朝詩研究の領域では長い間伝記的手法や社会反映論的な手法が根強い影響を持っていた。もちろん、ポスト構造主義の概念を用いた、洗練されたテキスト分析も行われてきたが、次のような Armstrong の意識が広く共有されるに到ったのは、やはり最近のことと言わざるを得ない。

Perhaps what was lacking in these studies (and what may account for the subsequent lack of creative followers) was an account of the language of Victorian poetry in relation to both formal and cultural problems, an attempt to see these things as inseparable from one another. ... [T]o read a Victorian poem is to be made acutely aware of the fact that it is made of language. (Armstrong 11)

「ヴィクトリア朝詩研究^{マニフェスト}宣言」^{マニフェスト}とも呼ぶべき Armstrong の「序論」にあるのは、同時代の政治と生政治のあり方がいかに個々の詩作品に投影されているかをあげつらう反映論的アプローチではなく、詩の言語自体が政治や認識論に関わる闘技場そのものであるという仮説に基づいて、それが政治的・認識論的な意識と無意識を形成していく過程を見ようとするアプローチであり、その意味ではポスト構造主義、あるいはフェミニズムやポストコロニアル批評と連動する動きであると言える。ちなみに、Armstrong はその後のヴィクトリア朝韻律学関連論集にも継続的に寄稿を続けている。

一方、Reynolds は、19 世紀ヨーロッパ諸国の国民主義的政治運動、とりわけイタリア統一運動 (Risorgimento) と、「連合王国」すなわち多国家帝国 (a multinational empire) としてのイギリスのあり方との差異に、当時のイギリス人が敏感だったことから説き起こして、テニスン、ブラウニング夫妻、アーサー・ヒュー・クラフの代表作に共通する〈婚姻〉の主題が国民統合のそれと通底していたと論じていく。とはいえ、これらの詩人が国家イデオロギーに荷担していたことを論難しようというわけではない。政治的には radicals に分類されるクラフは言うまでもなく、ブラウニング夫妻は詩の背景としてしばしば英国を避けてイタリアを選び、中世騎士道物語に枠組みを依拠したテニスンは自作の虚構性を強く意識してい

た。Reynolds は、多国家・多国民帝国としてのイギリスのみならずイタリアを主としたヨーロッパ諸国の同時代史と、上記の三詩人の作品を主としたヴィクトリア朝文学テキスト（小説への言及も多い）の繊細な読みとの間を自由に往還してみせることによって、彼が論じようとする〈公〉〈私〉二領域の一体性をいわば *performative* に示しているのではないか、というのが私の現時点での解釈である。

また同書で私が特に注目したいのが、コヴェントリ・パトモアの韻律論への言及（63-5）やクラフの古典韻律学との格闘（136-8）など、後述する Yopie Prins ら、韻律学を歴史化しようとする試みに取り組んできた学者らと共通する素材に言及している点である。ほかにも、エリザベス・バレット・ブラウニングがミルトンの詩の韻律を調べている手紙（音節の弱強を表す記号が添えられている）や、ドライデンの英雄対韻句を難ずるエッセイの一節を引用して、憐憫・良心・自由といった彼女の政治的理念の例証としている（93-6）。これらの指摘が歴史的背景とどの程度まで深く関連しているかを評価することは、私の手には余るので差し控えるほかないが、ここで注目に値すると思われるのは、詩と国民形成の関係性を論じる過程で、詩形や韻律に関する議論を不可避と考えた Reynolds の方法論である。ちなみに、同書の文献一覧には Prins の名は挙げられていないので、両者がほぼ同時に同じ領域に関心を寄せたという事実そのものが興味深く思われる（むろん、神秘的な偶然の一致を想定しているわけではない。何らかの形で学術的コミュニケーションが成り立っていたのであろう）。

さて、前段でやや先走って名前を挙げた Yopie Prins の ‘*Victorian Meters*’こそ、ヴィクトリア朝韻律学の分野に鮮烈な光を投げかけ、韻律学の歴史化という大きな潮流を生み出した *seminal* な論文と位置づけて良い。*Cambridge Companion* に収められた短い論考にすぎないが、その影響力は大きく、もしこの問題系に関心を持ったなら真っ先に読むべき一文である。なお、Prins に先んじてヴィクトリア朝詩の韻律学を論じた比較的最近の研究として、Dennis Taylor, *Hardy's Metres and Victorian Prosody* (Oxford: Clarendon Press, 1988) があるが、回顧的に開けたパースペクティブで視野に入ってくる一書として、ここでは一線を画しておく。

Prins が韻律学の歴史化に向けて抽出した主な論点としては、1) 19 世紀中葉と世紀末にそれぞれ韻律学をめぐる論説・論争が盛んになり、それらを踏まえて 20 世紀初めに George Saintsbury が刊行した *History of English Prosody* をもってひとつの頂点とする時代区分を設定したこと、2) 19 世紀中葉の論争の中心にコヴェントリ・パトモアの韻律論を位置づけたこと、3) 古典韻律学が教授される場としてのパブリックスクールと、その代替としてイギリス文学が教えられる公立学校との間の教育論的対立を、“English ear” として形象化される国民意識の形成過程と関連づけたこと、4) Prins が「六歩格熱 (hexameter mania)」と呼ぶ、古典韻律法を英語詩に導入しようとする一連の試みに着目したこと、以上 4 点が挙げられる。これらはその後のヴィクトリア朝韻律学に関する研究書が一様に共有する観点であり、まさにそれゆえにこの論文は韻律学の歴史化に向けた母胎となったと言える。

第一の点について補足すると、Saintsbury 自身、別の簡略な著書 *Historical Manual of English Prosody* (London: Macmillan and Co., 1910) の冒頭で、自分が同書で提示するのは “the leading systems or principles which have actually underlain, or do underlie, the conflicting views and the discordant terminology of the subject” (4) だと述べている。*Manual* という書名は、すでに確立された規則なり分析法なりを客観的に提示する手引きを連想させるが、決してそうではないと、断っているわけである。第二、第三の点には、後ほど立ち戻りたい。第四の点については、この 5 年後、また別の論集に Prins は ‘Metrical Translation’ を寄稿している。ここではホメロス叙事詩を翻訳するには古典詩と同じ弱弱強六歩格、いやむしろ古典詩同様、「音量」によって短短長六歩格を用いることを推奨し、「六歩格熱」を誘発したマシュー・アーノルドを大きく取り上げ、ヴィクトリア朝期のさまざまなホメロス翻訳およびそれらをめぐる言説を比較検討し、韻文の翻訳という問題について行き届いた論を展開している。本論文もまた今後長く参照されることになるだろう。

上述の四点にさらにもう一点加えるとすれば、韻律が声や発音とは別の次元にあるという Prins の指摘も、後の論者たちが踏襲するところである。これは、韻律は実際にどう発音するかの問題ではなく、あくまでも約束事

に従って音の長さを計量する知的で観念的な作業だとするパトモアの主張に沿った考え方である。これ自体は狭義の文学的問題にすぎないが、公的領域（法・規則）と私的領域（身体・感情）の境界が相互に侵犯し合う近代社会というフーコー的な世界観とも通底して、文学以外の分野にも応用の利く着想ではなかろうか。ちなみに、Prins は論中で二度、直前に刊行された Matthew Campbell に言及しているが、その二度目となる結論部では Campbell があまりにナイーブに詩のリズムを「韻文形式での発話の実演」(Campbell 63) と措定していることへの不満を明らかにしている。なるほど、声が韻文で劇的に再現されている（“the dramatic representation of voice inverse”）という面はあるかもしれないが、逆に、印刷された文字として固定化・観念化されているのではないか（“the writing of voice, inverse”）、というのが Prins の反論である (Prins 110)。ただ、パトモアの主張を、本質的に正しい韻律論として丸呑みに受け入れて良いものかという疑問は残るのだが、今しばらくはその点には触れずにおく。

Prins の論考を引き継いで、韻律学の歴史化という可能性に向けてさらに大きな一歩を踏み出したのが、Jason Rudy である。Rudy の研究の大きな特色は、第一に、身体論と関係づけることで、より広い文化的文脈の中に韻律論を再配置しようとしたこと、第二に、痙攣派詩人へのアンチテーゼとしてコヴェントリ・パトモアの韻律論 (*Essay on English Metrical Law*, 1857) を読み解いた点にある。特に後者には二重の意義がある。すなわち、痙攣派という文学史的にはマイナーな詩人たちを再評価したという意義（ただし、すでに *Victorian Poetry* 2004 年冬号で Rudy は、Charles LaPorte とともに *Spasmodic Poetry and Poetics* と銘打った特集の編集をしている）と、パトモアの韻律論を歴史の一時点における論争という文脈の中に差し戻すことで歴史化したという意義である。実は、Rudy を読んだ後で、Prins の結論に対する上述のような疑問がはたと頭に浮かんだわけである。

タイトルから推察されるとおり、Rudy の論は、ヴィクトリア朝に先立つロマン主義の時代に盛んに用いられるようになった電気の隠喩が持つ意義から語り起こされる。メアリ・ロビンソン（ほかのデラ・クルスカ派詩人）やフェリシア・ヘマンズら女性詩人を中心に取り上げ、その作中に

表れる電気の比喩が、感情が身体的経験と化す直接性を表しているかに見えて、その実、“surprising resistance to a poetics of felt experience” (21) を示しているとする。テニスンの“Telegraphic Poetics”に関する一章をはさんで（本学会誌第6号で宮丸裕二氏がその書評を書いた Richard Menke, *Telegraphic Realism: Victorian Fiction and Other Information Systems* (Stanford: Stanford University Press, 2008) を思い出す読者も多いことだろう）、シドニー・ドーベルの物語詩 *Balder* (1853, dated 54) を中心に、痙攣派詩人による詩的实践が詳述される。Rudy による痙攣派詩人の文学史的位置づけは、次の一文に端的に述べられている。

Spasmody [i.e., Spasmodic prosody] as Dobell practices it moves the experience of poetic sensation from the semantic (as in the poems of Robinson and Hemans) and the structural (as in Tennyson's *Princess*) to actual, physical embodiment. (Rudy 79)

ドーベルは、詩の韻律は身体の生理学的経験として受け止められた後、脳内で精神によって処理され、より高度な思考や観念へと高められると考えた。Rudy は、生理学とヴィクトリア朝詩とを結びつけて考察しようとする先駆的な試みとして Kirstie Blair を挙げている。確かに、“Shocks and Spasms: Rhythm and the Pulse of Verse” と題した第二章にある次のような一節は、Rudy の痙攣派詩人論の大枠を用意しているように思われる。

Engagement with the pulse in nineteenth-century physiology and pathology, and the perceived connections between writing poetry and particular forms of disordered pulse and circulation, meant that the analogy of pulse and rhythm was taken very seriously by doctors and investigators into the heartbeat as well as by poets. (Blair 73)

ちなみに、文化現象の一側面を文学テキストの生成と結びつけて論じるのは、近年よく見る類いのアプローチではあるが、どれほど多くの傍証が引かれていても、そうした論説にはえてして牽強附会の感が付き物である。その点、Rudy はまれな類いに属する。おそらく丁寧な詩テキストの読みが、書き手に対する信用を高めているのだろう。その点は Blair も同様で

ある。次の一節は Rudy の詳しい議論よりも、ドーベルが目指したところをわかりやすく伝えてくれるかもしれない。

Dobell emphasizes the need for ‘equal’ time intervals, an ideal of isochronic regularity. His association of this with the ‘healthy’ heart, moreover, implies that the unhealthy heart might lead to imperfectly timed utterance. (Blair 86)

痙攣派詩人の理解については Blair が補助線として役立つが、先述の通り、痙攣派への反論としてパトモアの韻律論を位置づける Rudy の論旨はまことに鮮明である。Rudy はパトモア韻律論の“key passage”として次の一節を引用している。「私が例示可能と考えるとおり、大部分において、[詩脚は]物質的で外的な存在を一切有せず、頭（精神）の中にその位置を占める。頭（精神）はすべてものの中にリズムを求め、リズムの観念が否認されないところならどこでも、想像上の『律動』^{ビート}で印を付けることに喜びを見いだす。」(Rudy 115 から再引用) パトモアはこのように、詩の韻律から、声を含めた人間の身体的要素を捨象しようとした。だが、やがてパトモア自身、理論と実践の切断に苦しむようになり、その和解の試みとして 1877 年刊行の *The Unknown Eros* を書いた。痙攣派との論争のさなか 1854 年に発表された *The Angel in House* がほとんど平板とも言える弱強四歩格四行連だったのとは対照的に、こちらはきわめて自由なオード形式で書かれており、それは実際にはパトモアが痙攣派の生理学的詩学に当初から多くを負っていたことを示しているのだと Rudy は論じている。最後にスウィンバーンについて一章を割いて、Rudy は同書を閉じている。

この領域で最も新しい研究書が Meredith Martin の *Rise and Fall of Meter* である。ホプキンズを世に送ったことで知られるロバート・ブリッジズを「狂言回し」として、18 世紀末から第一次世界大戦後に至る「長い 19 世紀」にわたる韻律学の歴史を、豊富な情報を盛り込んで論じ尽くした一書で、200 頁ほどの本であるにも関わらず、ほとんど「浩瀚な」という形容詞を添えたくほど読み応えのある研究書である。Martin は元々ホプキンズ研究者であるらしい。本書の骨子は（少なくとも一面では）、しばしば「モダニスト詩人」として扱われるホプキンズを、これまでいくつかの

研究書を頼りに私が述べてきたようなヴィクトリア朝期の韻律学をめぐる論争 (“the Prosody wars”) のさなかに、位置づけることにあると言える。パトモアとホプキンズの関係については、Rudy も触れていて、それまで私の頭の中では全く結びついていなかった二人なので印象深かったが、ここではさらに詳しく二人のやりとりが述べられている。

とはいえ、本書の論述は多岐にわたるので、ホプキンズ詩学に特に関心のない向きにも、興味を惹かれる箇所は何かしらあるだろう。私自身は2点、パブリックスクールにおける古典韻律学の授業など、教育の分野における韻律学の影響を記述した章と、ヴィクトリア朝韻律学の afterlife ともいうべき第一次大戦時の詩をめぐる状況に関する章が、たいへん興味深かった（ちなみに、教育との関連でいえば、韻律学は19世紀には、正書法、語源学、統語論と並んで歴史的文法の一分野とされており、また韻律学自体は、発音、発話、比喩、作詩法の四分野に下位区分されていたとのことである）。

ヴィクトリア朝韻律論に関する最近の研究書としては、上記のほかに Jason David Hall 編の *Meter Matters* があるのだが、論集という性質上、その意義をまとめて論じることは難しい。同書には、拙稿で取り上げてきた研究者の多くが寄稿しており、まさにヴィクトリア朝詩韻律学研究の精華という観がある、という印象のみ述べるにとどめたい。同じく印象論にすぎないが、「韻律と意味」をめぐる Armstrong の思索的な論考と、テニスのよく知られた叙情詩 “Break, Break, Break” を歌にするさまざまな試みを論じた Prins の論文に、新鮮味を感じた。

話はさかのぼるが、ヴィクトリア朝詩における韻律論の歴史性は、英米の学者たちの間で、どのような経緯をたどってこれほど大きく問題化されるに至ったのか。その経緯については、ヴィクトリア朝韻律論を特集した学術雑誌 *Victorian Poetry* (Summer 2011、以下 VP) の巻頭論文がなかなか興味深い。同号を共同編集した Meredith Martin と Yisrael Levin が共著した論文 “Victorian Prosody: Measuring the Field” がそれである。二人は2007年 North American Victorian Studies Association の年次大会 “Victorian Materialism” に参加した際、多くの研究発表の中に、彼らが cultural neoformalism と呼ぶ共通テーマを見いだした。そして “hexameter

machine”、マイケル・フィールドの出版史、“The Burial of Sir John Moore after Corunna”の歴史に関する発表を聞いた彼らは「詩的形式について、より抽象的でない、より歴史的で、実際、より物質的であるような研究が起りつつあることは明らかだ」と感じたと言語 (VP, 149)。ここまで拙稿中に名を挙げてきた研究者らが、学会の場を通して協力関係を築き、共同で研究を進めてきたらしいことが仔細にうかがえて、うらやましくも刺激的に感じた。

最後になるが、今後の研究動向はどうなるだろうか。私個人の印象としては、Meredith Martinの著作で、当面ひとつの区切りに達したようにも思われる。とはいえこれからも、ヴィクトリア朝を中心とした韻律学に関する、従来看過されてきた *obscure* な文献の「発掘」作業は、当時の詩人・批評家・学者らにとどまらず、個人の回想録や教育者など、幅広い著作家達について、さらに進むことだろう。それに伴って、Prins や Rudy、Martin らがこれまでに設定してきた問題系の組み替えも起こるかもしれない。また、韻律学への関心は、詩を読解する手法として、新しい精読 (*close reading*) のあり方を示唆することだろう。それによって、詩行の意味内容のみを取り上げることに多くの読み手が慎重になれば、より重層的な意味の様相が開けることだろう。今後、個々の詩作品を取り上げる際には、詩人が韻律法についてどのような姿勢を取っていたかを、確認する必要があるだろう。一方、わが身を省みるに、英語を母語としない日本人研究者が、こうした研究動向の中で、何か貢献できることがあるだろうか。ここで、韻律が発音そのものではなく構築された観念であることを再度確認したい。そうであればこそ、外国人研究者であっても、否、英語詩のリズムを「自然な」所与として措定することに躊躇を覚えざるを得ない外国人研究者だからこそ、貢献できる可能性はあるのだ——とまで言い切る自信はあまりないのだが、韻律学は詩の研究の根幹であるだけに、今後も研究動向から目を離せないことだけは確かである。

参考文献一覧

Derek Attridge, *Well-Weighed Syllables: Elizabethan Verse in Classical Meters*.

- Cambridge, London, New York, New Rochelle, Melbourne and Sydney: Cambridge University Press, 1974.
- Isobel Armstrong, *Victorian Poetry: Poetry, Poetics and Politics*. London and New York: Routledge, 1993.
- Kirstie Blair, *Victorian Poetry and the Culture of the Heart*. Oxford: Clarendon Press, 2006.
- Matthew Campbell, *Rhythm and Will in Victorian Poetry*. Cambridge: Cambridge University Press, 1999.
- Jason David Hall, ed. *Meter Matters: Verse Cultures of the Long Nineteenth Century*. Athens, OH: Ohio University Press, 2011.
- Meredith Martin, *Rise and Fall of Meters: Poetry and English National Culture, 1860–1930*. Princeton and Oxford: Princeton University Press, 2012.
- Yopie Prins, 'Victorian Meters,' in Joseph Bristow, ed., *The Cambridge Companion to Victorian Poetry*. Cambridge, New York and Melbourne: Cambridge University Press, 2000. pp.89–113.
- Yopie Prins, 'Metrical Translation: Nineteenth-Century Homers and the Hexameter Mania,' in Sandra Bermann and Michael Wood, eds. *Nation, Language, and the Ethics of Translation*. Princeton and Oxford: Princeton University Press, 2005. pp.229–256.
- Matthew Reynolds, *The Realms of Verse: English Poetry in a Time of Nation-Building*. Oxford: Oxford University Press, 2001. Reprinted 2008.
- Jason R. Rudy, *Electric Meters: Victorian Physiological Poetics*. Athens, OH: Ohio University Press, 2009.
- Victorian Poetry*. Vol. 49, No. 2, Summer 2011. West Virginia University Press. Paired with *Hopkins' Quarterly* (Vol. 38, Spring-Summer 2011), which is also organized around the subject of Prosody.